



病院薬学講座 特任教授

望月 眞弓

モチヅキ マユミ

医学博士

Project Professor

Division of Hospital Pharmacy Science

MOCHIZUKI Mayumi

Ph.D. in Medicine

添付文書／患者／
安全性／個別化医療

package insert／patient／
safety／precision medicine

研究概要

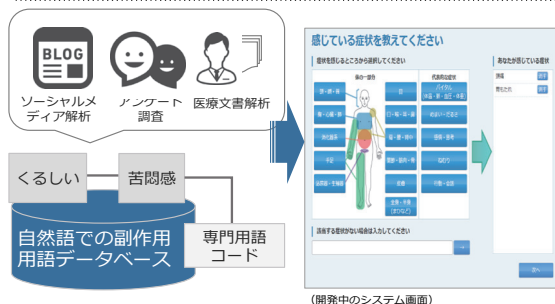
医薬品はリスクとベネフィットのバランスの上に成り立っており、リスクがあってもそれを超えるベネフィットがあれば、リスクを最小化しながら使われます。これが医薬品の適正使用です。そのためには、まず、どれだけのベネフィットがあって、どれだけのリスクがあるかを適切に評価しなければなりません。このときの評価のプロセスと解析法は科学的に適切なものでなければなりません。そして、さらに論文等の情報として提供された評価結果を適切に解釈し、目の前の患者に適用することも多くの知識・技能を要します。これらは、薬剤師あるいは薬学者に必須のものであり、情報を適切に取扱い、患者に活かすことが、病院薬学が行う研究の基本です。

私はこれまでに医薬品情報学、薬剤疫学、薬剤経済学をベースに様々な研究を行ってきました。特に一般用医薬品に関する研究は数多く行っており、そのきっかけとなった一般用医薬品のリスク分類に関する研究は現行の要指導・一般用医薬品の販売制度の基礎となりました。そこから発展する形で、生活者に理解される添付文書の構成に関する研究や、患者自身に副作用を早期発見してもらい、そしてそれを国への報告へとつなげる仕組みに関する研究など、患者と医療をつなぐ研究に力を入れてきました。この他、大規模データベースを使った安全性や有効性情報の創出、ゲノム解析に基づく薬物治療の個別化に関する研究、プラセボ効果に関する研究なども実施してきました。

現在は、要指導・一般用医薬品の添付文書記載要領の見直し、nocebo効果に関する研究、AIを利用した医薬品適正使用チェックシステムの開発などを、病院薬学という講座の特徴を活かし、医療現場の薬剤師や医師等と共同して進めています。

患者が早期に副作用を自ら発見するためのシステム開発

ふだんの話言葉（自然語）から自覚症状を検索し、副作用の可能性を早期に認識できる



I have conducted various research based on drug informatics, pharmacoepidemiology, and pharmacoeconomics, particularly many researches on OTC medicines; e.g. research on risk classification of OTC medicines, development understandable package inserts for consumers, and patient adverse drug reaction reporting system. Those researches have been done to connect between patient and medical care. In addition, we have been conducting research on personalized medicine based on genome analysis, related factors of placebo effect, creation of safety and efficacy information by analyses of large medical record data. Currently, I study on the package insert of OTC medicines, the nocebo effect, and the development of check system for off-label use or contraindication use using AI.

主な論文

1. 鹿村ら: 災害時に有効活用できるOTC医薬品. 医薬品情報学. 18: 242-250 (2017).
2. Hakamata et al.: Ethnic and gender differences in genetic polymorphisms of tumor necrosis factor (TNF)- α in a Japanese population. Jpn J Clin Pharmacol. 48: 21-26 (2017).
3. 望月. 「薬害を防ぐ社会」に繋ぐ薬害教育. 保健医療社会学論集. 27: 27-31 (2017).
4. Hashiguchi et al.: Genetic polymorphisms of enzyme proteins and transporters related to methotrexate response and pharmacokinetics in a Japanese population. J Pharm Health Care Sci. 9: 35 (2016).
5. 高橋ら: セルフメディケーションにおける薬剤師と需要者間の双方向性コミュニケーションの実現に向けた質問紙調査. 医薬品情報学. 18: 160-171 (2016)

プラセボ効果の個人差に関する研究

「プラセボ効果」とは？

この薬、前も頭痛によく効いたんだよな～！

効果UP!

プラセボ効果 + 薬自体の効果 + 自然な回復

薬物治療全体の効果

・薬が効いた過去の経験
・薬の効果への期待
によって向上する治療効果。

プラセボ効果には個人差がある。

(出やすい人と出にくい人がいる！)

個人差を考慮しないと

・治療効果が最大限に引き出せていないかもしれない...

・薬の有効性・安全性の評価が正しく出来ていないかもしれない...

個人差を生じる要因を探る！

(考えられる要因)

・生活習慣

・脳活動

・パーソナリティ (性格) 特性

・遺伝子多型 (DNAの個体差)

・人種 など